

# 協働によるよりよい幼児教育を目指した カリキュラム・マネジメントの実践について

朴 信 永\*

For the Practice of Curriculum Management  
with the Aim of the Better Early Childhood Education by Collaboration

Shinyoung PARK

## 要 旨

本研究では、幼稚園の園内研修をととして、協働によるよりよい幼児教育を目指したカリキュラム・マネジメントの実践を試みた。具体的には、教育課程（年間指導計画）が日々の保育活動や子どもの姿にどのように結び付いているか振り返ってみることで保育実践力の向上を試みた。その過程で保育者はどのような気づきがあったか、自由記述による調査を二回行った。その内容をカテゴリー分析した結果、保育者自身の保育を振り返る内容が22.3%、それまでの子どもたちの育ちを振り返る内容が18.1%、園の年間指導計画の実践的な理解に関する内容が35.8%、他者との話し合いをととして振り返る内容が23.8%抽出された。保育に関する三種類の省察の視点と、年間指導計画を日々の保育活動と関連づけ実践的に捉え直そうとする視点が表れた。

## 1. はじめに

現在、幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実施、評価、改善の一連の「カリキュラム・マネジメント」の適切な実施が求められている。カリキュラム・マネジメントとは、学校の教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程（カリキュラム）を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、また、そのための条件づくり・整備である（尾木・草野，2008）。新しい幼稚園教育要領等の理念を実現するために必要な方策について、文部科学省第7回幼児教育部会（平成28年5月）では、各幼稚園等には、幼稚園教育要領等を受け止めつつ、幼児の姿や地域の実情等を踏まえて、各幼稚園等が設定

---

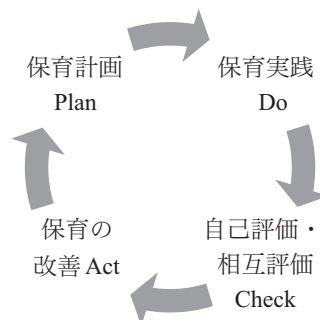
\* 教育学部 子ども発達学科

する教育目標を実現するために、幼稚園教育要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかというカリキュラム・マネジメントが求められるとした。

教育課程とは、幼稚園教育要領解説によると、「幼稚園における教育機関の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにし、幼児の充実した生活を展開できるような全体計画を示す」とされる。通常、幼稚園の年齢別教育課程の中には、その園の年間教育目標および年間指導計画が記されている。林（2011）によれば、教育課程とはクラスごとの計画ではなく園全体の計画であり、時期ごとに取り組む活動や指導案ではなく、入園から卒園までの長期的な視野をもって子どもの心身の発達過程や地域の実態に即応して編成されるものである。クラスごとの計画ではなく園全体の計画であって、長期的な視点で編成されているところから、どこか毎日の保育実践とはかけ離れ、週日案との関連性を意識しにくい場合が少なくない。

奥山・山名（2006）は、幼稚園の保育者にとって、教育課程・指導計画とはどのような意味を持っているのか、また計画的な保育をどのように考えているのか、保育者が日常の保育を計画する際の意識について実態調査を行った。それによると、「教育課程（カリキュラム）がありますか」という質問に対して、分析の対象者435名中、363名（83％）の保育者が「ある、目を通している」と回答し、24名（6％）の保育者が「あるかどうか分からない、教育課程はない」と答えた。また、週案や日案といったもっとも個々の幼児に応じた計画がなされなければならないものが、学年の代表者や主任など、担任以外の者によって計画が作成されている実態も明らかになり、発達の視点から個々の幼児の「遊び」での経験を理解した保育やその計画が実現しているとは考えにくい現実も明らかとされた。この点について奥山・諸岡（2016）では、「育つことが期待される心情・意欲・態度」あるいは「身につけることが望ましい～」という理念については共感しつつ、具体的な保育の展開では、抽象的な理念と具現化された実践との間に乖離が見られるのが保育の現状の一部なのかもしれないと考察している。

本研究の園内研修では、子どもの実態把握に基づいた「保育計画（Plan）→保育実践（Do）→自己評価・相互評価（Check）→保育の改善（Act）」という保育実践サイクルを組織的に取り組むために、連携・協働によるよりよい幼児教育を目指したカリキュラム・マネジメントの実践を期して、保育実践力を高める方策を探求することにした。日々の保育が何を根拠に取り組まれているのかを自覚的にとらえ、反省的实践を実際化することにより、よりよい保育への昇華を成すサイクルを模索するためである。柴崎（2009）で示された、保



<p><b>Plan（目標）</b>：具体的に何をどのように実施したいのか、目標を設定し、計画を立てる。</p> <p><b>Do（実施）</b>：その計画に基づいて実際に具体的な取り組みを行っていく。</p> <p><b>Check（評価）</b>：その実践の結果、立てた目標がどこまで達成されたかを自己評価する。一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ、保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育を自ら評価・改善する。自己評価、各保育者同士の相互評価のためには、共通のルール、基準が必要である。</p> <p><b>Action（改善）</b>：その評価の結果を踏まえて、これからどう改善していくかを考えて、次の改善計画に反映させていく。</p>
--

育の質を高めるためのPDCAサイクルは上記のとおりである。

本研究では、A幼稚園とB幼稚園の教育課程（年間指導計画）の見直しに関する園内研修を通して、保育者一人ひとりによる年間指導計画の点検がどのように日々の保育実践力の向上につながるか探索的に検討する。

## 2. 方 法

2014年4月より二年間にわたり隔月で実施された園内研修に参加しているA幼稚園とB幼稚園の教諭は、園長、主任保育者を含め22名であり、筆者は園内研修の講師を担当した。A、B両園は同じ学園に所属している幼稚園であり、同じ教育課程をもっている。

本研修では特に、保育者同士の協働・連携に基づいた相互評価のため以下の点を重視した。

- ① A、B幼稚園（以下、AB園とする）の教育目標・教育方針・教育課程の共通理解をもとに振り返り、語り合い、相互に見合える取り組みを工夫する。
- ② 子ども一人ひとりの遊びの充実を図ることを基本に子どものエピソードを作成し、回し読みすることにより、保育者自身による自己評価とともに保育者同士の相互評価を促す。

**園内研修の概要** 園内研修の全体的な流れおよび概要は下記のとおりである。

- ① 幼稚園教育要領&解説書を再度確認した。
- ② AB園の教育課程（年間教育目標および年間指導計画）を保育者全員に配付し、皆で確認を行った。
- ③ 幼稚園教育要領&解説書を傍らに、前年度の各年齢別年間指導計画を批判的な視点で見直しながら、一年をかけてある特定の子ども（たち）を追うエピソードを作成し、各学年のグループ内で子どもの姿について話し合った。
- ④ 年間指導計画の見直し・修正のために前年度の年間指導計画の上に、実際の子どもの姿および保育活動の実際を記述し、次年度の引き継ぎにも活用できる年間指導計画作成を試みた。

2014年度は保育の質の改善を目標に、それぞれの先生から子どもの様々なエピソードを集め、お互いの子ども理解について話し合う時間とした。子どもに関する記録を回し読みし、子どもの姿を振り返って話し合うことによって、同じ学年の担任同士様々な情報を共有することができ、自然と保育カンファレンスにもつながった。その後は、子どもの今

の姿が幼稚園の教育課程にどのようなにつながっているのかと考えるようになった。2015年度の春から夏にかけ、園内研修に参加した保育者は、まず2014年度の4月から8月の年間指導計画を確認し、2014年度に実際行われた保育の活動内容や子どもの姿などを月ごとの回想により記録した。その際、同学年のグループ内で話し合ったり、他学年担当者の助言を聞いたり、お互いの記録用紙にコメントを書いてもらう機会をつくった。その後、2015年度夏から冬にかけて、同学年の担任保育者グループ内の話し合いを通してそれぞれの学年の年間指導計画の9月から3月の部分に実際の子どもたちの姿や教師の援助などを追記し、新しい年間指導計画を作成した。

AB園の前年度（2014年度）年間指導計画表の中で、年長クラスの9月から12月の指導計画表の一部を表1に示す。従来の年間指導計画と日常の保育との関連性を理解しつつ、新しく作成してみた年間指導計画は表2の通りである。

表1 前年度の9月から12月までの年間指導計画の一部（年長）

		9月	10月	11月	12月
生活の流れ		第4期			
		♠発表会・音楽会・作品展・終業式 ▲いろいろな食品や栄養に関心を持つ ♥病気の予防に関心を持つ 安全に気をつけて遊ぶ ♣中学生との交流を持つ			
子どもの生活するねらい	生活への取組	○自分なりの見通しを持って積極的に行動するようになっている ○今日・今週の予定などを知り、生活しよう			
	保護者との関わり	○社会事象に関心を持ち始め、話題にするようになる			
	遊びへの取組	○自分に自信をもって遊びだすようになる ○課題に向かって最後まで頑張ろうとしている ○仲間と一つの目的を持って考えを出しあったり工夫しながら遊ぶようになっている			
	友だちとの関わり	○友だちとの関わりが深まり、思いや考えを出しあったり教えあったりしている ○起きた問題を話し合って解決しようとしている ○ごっこ遊びなど、年少・年中児を誘っていつている			
	身近な環境との関わり	○冬の自然を見つけて感じたことを伝えたり、それらを使って遊んだりしている ○文字や数への興味が高まっている			

表2 追記された年間指導計画および実際の保育活動と子どもの姿（年長、9-10月）

	年間指導計画【子どもの生活するねらい】	保育活動の実際と子どもたちの姿
生活への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで生活を見通して準備や片付けをしている。</li> <li>・当番活動に積極的に取り組んでいる。</li> <li>・夏の疲れからか、体調を崩す子が増えている。</li> <li>・2学期の始まりを喜び、張り切って登園している。</li> <li>・昼食後に机を拭いたり、掃除をするなどを自分たちで進んで行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活のリズムを取り戻しのびのびと過ごすことができるようにする。</li> <li>・自分たちのやりたいことにじっくりと取り組めるように、遊びの場や時間を確保する。</li> <li>・当番の仕事に意欲を持つように積極的に取り組む姿を認める。</li> <li>・自分たちでできることを話し合い、子どもにまかせる部分を広げていく。</li> <li>・再び始まった園生活を充実して過ごす。</li> <li>・2学期の始まりとともに園生活の流れが早く取り戻せるようにする。</li> <li>・自分のしたいことをはっきり表現する。</li> </ul>
保育者との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休みに経験したことを話し、会話を楽しんでいる。</li> <li>・できるようになったことを何度もみせるようになっていく。</li> <li>・経験したことを自分なりに表現しようとするが、うまく話せない子もいる。</li> <li>・縄跳びができるようになったことを喜び、皆の前で披露する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休みに経験したことを発表する時間を設ける。</li> <li>・できるようになったことを見せ合ったり、挑戦する気持ちを持つことができるように認めたり、励ましたりする。</li> <li>・友達や保育者と話したり、遊んだりする中で安定して過ごす。</li> <li>・保育者や友達との再会を喜び誘い合って遊びを進めようとする。</li> </ul>
遊びへの取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のやりたいイメージを実現しようとしている。</li> <li>・運動的な遊びが盛んになり、ルールや勝敗に関心が高まっている。</li> <li>・自分なりの目当てに向かって、挑戦しようとしている。</li> <li>・運動会で行った様々な競技を遊びの中に取り入れ、楽しんでいる。</li> <li>・リレーやリズム遊びをしたり、みんなで話し合ったりする中で、運動会への期待や関心が高まっている。また、昨年の年長児のことを思い出し、自分なりにイメージを膨らましている。</li> <li>・玉入れ、リレーなど友達と力を合わせて遊ぶ楽しさを味わう。</li> <li>・仲間との遊びがある程度続くようになっていく。</li> <li>・勝つことの嬉しさや、負けて悔しいということを経験する。</li> <li>・挑戦したり競ったりする中で自分の力を思いっきり発揮しようとする。</li> <li>・年少、年中児に自分たちが行った競技や遊戯を教えたり、一緒に遊んだりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年少、年中児との関わりを大切にできるようにする。</li> <li>・負けてしまった時には、どうしたら次に勝てるかを話し合う場をつくる。</li> <li>・一人ひとりの頑張っている姿や意欲を認める。</li> <li>・運動会後も運動会で使った用具や行った競技を応用して遊びを取り入れる。</li> <li>・夏休み中の経験をもとに工夫して遊ぼうとする。</li> <li>・自分なりの目当てをもって取り組もうとする。</li> <li>・思いっきり走ったり、体を動かしたりする楽しさを感じる。</li> </ul>

友達との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲の良い友達同士の良さや得意なことがわかりお互いを認め合うようになってきている。</li> <li>・友達と力を合わせて取り組み、喜びを感じるようになっていく。</li> <li>・走るのが速い友達にどうしたら速く走れるようになるのか聞いている姿がみられる。</li> <li>・友達への関心が高まり、一緒に過ごしたい気持ちが強くなり、誘い合う声が聞こえる。</li> <li>・遊びのルールができ始めてきた。</li> <li>・仲間意識はあるが自分だけの思いで動いてしまうこともあり、トラブルになってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども同士で解決できない問題はクラス全体に投げかけみんなで考えるようにする。</li> <li>・グループで競争する運動遊びを取り入れる。</li> <li>・友達と一緒に身体を動かして遊べるものを提示する。</li> <li>・気の合う友達と誘い合いながら遊びを進めていく楽しさを味わう。</li> <li>・友達と力を合わせて遊ぶ楽しさを知る。</li> <li>・一緒に遊び方を考えていこうとする。</li> <li>・自分たちでルールを考えたり守ったりしながら遊ぶ。</li> </ul>
身近な環境との関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の自然物に触れ、積極的に遊びに取り入れて楽しんでいる。</li> <li>・公共の場、公共のものなどが分かり、大切にしようとする気持ちが出てくる。</li> <li>・赤や黄色に色づき始めた葉を見つけ、ままごと等のごっこ遊びに取り入れている。</li> <li>・秋の自然物を自分たちの遊びや、生活の中に取り入れて遊ぶ。</li> <li>・土の感触やいもの形、大きさなどに気付き収穫を喜ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園内外の自然に触れられるよう、場所や状況を把握しておく。</li> <li>・園外に出たら、交通ルールを守り、安全に過ごすことを知らせる。</li> <li>・遠足では駅のホーム、電車、バスの中など公共の場であるということを知らせ、マナーを守るように知らせる。</li> <li>・収穫までの生長や変化に期待を持って芋掘りに取り組むようにする。</li> <li>・夏から秋への季節の変化に関心を持つ。</li> <li>・園庭や通園コースの草花や稲の変化に気づく。</li> <li>・身近な自然物を使って遊ぶ。</li> <li>・収穫の喜びを味わう。</li> </ul>

**調査の手続き** 2015年9月、10月、園内研修の一環で行っている諸活動についてどのような気づきがあったか、今後の保育にどのように役立てたいか自由に記述してもらった。その後、自由記述の共通点の多い内容をカテゴリー分類した。なお、カテゴリー分類は2名で実施、2者間で一致しなかった記述に関してはその後の分析から除外した。

### 3. 結果と考察

自由記述を分析した結果、保育者自身の保育を振り返る内容が43件（22.3%）、それまでの子どもたちの育ちを振り返る内容が35件（18.1%）、園の年間指導計画の実践的な理解に関する内容が69件（35.8%）、他者との話し合いをとおして振り返る内容が46件（23.8%）、計193件の記述が抽出された（表3参照）。

カテゴリー分類は、大きく二つに整理できる。一つは、省察の視点によるものである。保育における省察は、保育者自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察の三つに分けられる（杉村・朴・若林、2009）。本研究における保育者の気づきの分類もこの3つの省察分類と同様となった。保育者は園内研修を通して自分自身の保育を振り返り、現在の保育を分析してみようとする視点が芽生えと同時に、子どもたちの育ちを振り返ることができたと思われる。大豆生田・三谷・高嶋（2009）は、保育の質を高める体制と研修のための根底となる要素として、①自分の保育を省察すること②職員間で保育を語り合うこと③新しい評価観④学び合い、育ち合う園内の体制や風土の四つを挙げてい



表3 自由記述からみられる年間指導計画作成における保育者の気づき

カテゴリーと記述例	頻度	割合
<p>〈保育者自身の保育を振り返る内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの姿に対し、教師の援助や環境構成など思い出したり、今、現在行っていることに対して、本当に子どもにとって正しいことであるかどうかを考えたり、実行してみて正しかったと確認することが大変だった。</li> <li>・子どもに対しての保育者の援助や活動を考えるのに役に立った。</li> <li>・その月のねらいに対して、自分自身がどのような活動をしてきたのかを振り返ることができた。</li> </ul>	43	22.3%
<p>〈子どもたちの育ちを振り返る内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今の子どもの姿を見直し、できているところ、できていないところに気づいた。</li> <li>・今回の見直しで子どもの姿がよりわかってきた。他のクラスの様子も今どんな姿で成長してきたかもわかるようになった。</li> <li>・子どもたちの今の姿を思い直し、できるようになって自信がついたことがあり、嬉しく思った。</li> </ul>	35	18.1%
<p>〈園の年間指導計画の実践的な理解に関する内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年間指導計画を見直すことで、今の時期の子どもたちの姿がどうあるべきかを改めて知ることができた。</li> <li>・年間指導計画を見直すことで、子どもたちがどこまでできているか、もう少し見直していかなければならないのか、皆の先生と話し合うことで、改めて意識して保育しやすくなった。</li> <li>・年間指導計画から下ろしたものを、子どもを思い浮かべながら具体的に話し合ったことは、その学年の意思統一が少しずつできていくと思った。</li> </ul>	69	35.8%
<p>〈他者との話し合いをとおして振り返る内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程を、皆でじっくり読むことで共通理解ができ、間違いを発見したり、実施の子どもの姿と照らし合わせることでできてよかった。</li> <li>・先輩の先生方に「こういうこともあるのでは？」とたくさん意見を頂いて、様々な視点から考えることができた。</li> <li>・同学年グループで話し合い、一つの考えだけでなく、別の考えを教えて頂いたり、見方を変えてみることでできた。</li> </ul>	46	23.8%
合計	193	

る。その中でも、多様な他者とともに子どもを語り合うことが重要であるとし、子どもの姿に基づいた省察は、自分自身を取り巻く同僚など、多様な他者との関係の中でこそ育まれると述べられている。本研修活動においても、他の保育者との話し合いにより保育者同士の情報の共有が図られ、「個々人の経験の知」から「共有による組織の知」へと広がるような取り組みになったといえる。

二つ目は、幼稚園の年間指導計画を日々の保育活動と関連づけて項目内容を実践的に捉え直そうとする視点である。年間指導計画を活用し、グループで保育の活動を振り返ることは、日々の保育の点検、反省、評価につながり、ひいては次年度の引き継ぎ資料となり得ることが明らかになった。同学年の保育者同士で共通理解を図っただけではなく、他学年の教育課程を理解しコメントをする立場になることによって、「担当外の子どもたちにも適切な関わりができた」との報告は、皆で全ての子どもを見る視点を思い起こさせていたといえる。

本研修のこのような活動は、幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントの基本となるものである。A、B幼稚園がどのような幼児教育を行い、子どもたちにどのような力を身につけてほしいかをもう一度周りのいろいろな保育者同士で話し合うことで、保護者や地域への説明責任を果たすことにもつながると考えられた。‘年間指導計画を見直すことで、子どもたちがどこまでできているかがわかり、今の時期の子どもたちの姿がどうあるべきか改めて知った’という記述から、単に同僚や子どもたちを理解するに留まるのではなく、年間指導計画という長期的なねらいに照らし合わせ、日々の子どもの成長・発達を促す遊びの工夫につながる可能性がうかがえたといえる。

奥山・山名（2007）は、教育課程に関する実態調査から、対象者の約半数の保育者は、日常保育で教育課程や年間指導計画の必要性をあまり意識していないということを明らかにし、幼稚園教育が、短期の到達目標に向かう教育ではなく長期的な発達の道筋や、園生活全体を通した育ちを重視するものであることを考えたとき、この数値が意味するものは今後の考察の課題になるとした。また、「遊びはめまぐるしく変化するので計画はできない」、「遊び以外の活動を計画すればよい」と回答した保育者や、「計画によって子どもの自由な活動が保障できなくなる」、「計画通りにはいかないので立案が無駄だ」と考える保育者が調査対象者の2割強もいることから、幼児主体の「遊び」の価値やそこでの計画の重要性の理解には課題があるといえる（奥山・諸岡、2016）。

本研修活動では、前年度の年間指導計画の上に、同学年グループの保育者同士が、表2のように保育活動の実際や子どもの姿を記述することで、教育課程（年間指導計画）に対する意識が変わったと思われる。年間指導計画を見直すことによって、保育者は幼稚園教育課程の一貫性、系統性を認識しつつ、日々の保育実践を振り返り、省察するようになった。教育課程の中身と、子どもたちの発達の過程との整合性を判断していく際、同学年グループでの話し合いだけではなく、他学年グループの助言を得たり、意見を交換することによって、次年度担当者への引き継ぎがスムーズに行われると思われた。日頃多忙を極める保育者にとって、園内研修の活動が次の仕事へ直接つながっているという実感は、研修活動への積極的な参加の原動力となる。また、研修や自己評価が実質的な保育の専門性向上に結びつくためには、「させられる」受動的なものではなく、主体的なあり方になっているかということや、子どもや自分がある項目を達成しているかの有無をチェックするだけでなく、実践的な文脈の中でのしっかりとした子ども理解の上で、「次はこうしてみよう」と意味を生成するストーリーとして展開する必要がある（大豆生田・三谷・高嶋、2009）。

#### 4. 今後の課題

本研究では、年間指導計画が日々の保育活動や子どもの姿にどのように結び付いているか振り返ってみることで保育実践力の向上を試みた。指導計画には保育独自の計画概念に関する理解が必要であり、それなくしては、抽象的・理念的な保育の目標と、具体的な日々の生活・活動を通しての子どもの発達とを関連づけて計画的な実践を行うこと、すなわち現在推進が求められている「カリキュラム・マネジメント」は実現しない（奥山・諸岡、2016）。そのためには、日々の事例を省察する力を養い、保育実践に活かせる方法を



協働的に模索する体制が必要であろう。今後、省察と保育実践力の関係性をより具体的に示す工夫をしていきたい。

## 引用文献

- 林富公子（2011）幼児期の教育課程と指導計画に関する研究の動向—日本保育学会における口頭発表（1985～2009）を中心に— 園田学園女子大学論文集 45, 259-268
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 文部科学省（2016）幼児教育部会（第7回）における検討事項（平成28年5月）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1370316.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1370316.htm)（2016年8月15日16時47分）
- 尾木和英・草野一紀（2008）改訂学習指導要領に対応した学校経営の展開 天笠茂（監修）第一法規
- 奥山順子・山名裕子（2006）幼稚園教育における計画の位置づけ—保育者の意識調査にみる保育の計画性と保育者の専門性— 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門 61, 83-90
- 奥山順子・山名裕子（2007）幼稚園教育における計画の位置づけ—保育者の計画理解と「遊びを中心とする保育」— 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門 62, 43-51
- 奥山順子・諸岡美佳（2016）3年保育の教育課程の再編成(2)—保育における計画概念の理解からとらえる保幼小連携への展開の可能性— 秋田大学教育文化学部研究紀要 38, 111-120
- 大豆生田啓友・三谷大紀・高嶋景子（2009）保育の質を高める体制と研修に関する一考察 人間環境学会紀要 11, 17-32
- 柴崎正行（2009）保育所における自己評価 別冊「発達」新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて 無藤・柴崎（編）ミネルヴァ書房 155-158
- 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃（2009）保育における省察の構造 幼教育研究年報 31, 5-14

## 付記

本研究は、「岩倉曾野保育研究会」の平成26・27年度研究成果の一部です。本研究にご協力くださいました岩倉曾野保育研究会の廣中弘子様をはじめ、研究組織の皆さまに心より感謝いたします。